

糖尿病

- ・糖尿病のお薬は、膵臓からインスリンを出させたり、腸での糖の吸収を遅らせたり、尿と一緒に糖を出したりして血糖を下げます。
- ・副作用として低血糖症状が現れることがあります。また体調の変化やお薬の飲み合わせなどでも副作用が新たに現れることがあります。そのような場合は速やかにブドウ糖や糖分を摂って下さい。ひどい低血糖では意識がなくなることもあります。そういったことが起きる可能性があることはご家族やまわりの方にも知らせて下さい。
- ・どうしても薬が飲めない日が続きましたら（→シックデイ）、早めに受診して下さい。
- ・併用を注意する薬剤があります。他の薬剤を使用している場合や、新たに使用する場合は、必ず医師または薬剤師に相談して下さい。

※低血糖症状：脱力感、強い空腹感、冷や汗、動悸、手足のふるえ、意識が薄れるなど

シックデイ

- ・糖尿病の人がかぜなどの病気にかかった時のことです。血糖値が乱れやすく、危険な合併症が起りやすいためこのような時は注意が必要です。

<食事がとれない場合>

- ・1型糖尿病の場合：たとえ食事をとれなくてもインスリン注射を中止しない。
- ・2型糖尿病の場合：内服薬は薬剤の種類によって対応が異なります。インスリン注射の場合は1型糖尿病と同じです。

※いずれの場合も対応についてあらかじめ主治医に相談しておくことが大切です。

※対応方法がわからない時は病院に連絡または受診して下さい。

高血圧

- ・1日で一番高い血圧は朝起きてトイレに行ったあとに測る血圧です。
- ・また腕で測る血圧が正しい血圧ですので、自宅でも腕で血圧を測りましょう。
- ・血圧には季節変動があります。また測る毎に違う値が出ます。従ってできるだけ毎日測って、血圧手帳などに記録して主治医に見せて下さい。
- ・血圧が高ければ、全身の血管が傷まないように血圧を下げる必要があります、お薬を飲んでもらいます。
- ・血圧が下がることにより、めまいなどがあらわれることがあるので、高いところでの作業や自動車の運転など危険を伴う機械の操作には注意して下さい。
- ・また血圧が下がりすぎると一時的に意識がなくなるようなこともあるので、これらの症状があらわれた場合は、使用を中止してただちに再診するようにして下さい。
- ・例えばカルシウム拮抗剤に分類されるお薬はグレープフルーツジュースによってお薬の

作用が強くあらわれることがあるので、一緒に飲まないでください。

・併用を注意する薬剤があります。他の薬剤を使用している場合や、新たに使用する場合は、必ず医師または薬剤師に相談して下さい。

高コレステロール血症・高中性脂肪血・脂質異常症

・悪玉コレステロール（LDL コレステロール）や中性脂肪（TG）が高い状態を言います。

・全身の血管を傷める（動脈硬化）ので、頭や心臓の血管が詰まってしまう可能性があります。そのためにコレステロールは適切な値にしておく必要があります。

・まずは脂っこいものを控える食事療法や有酸素運動をする運動療法で良くなることもありますが、なかなかできなかつたり高くなる体質だつたりすることもあります。

・その場合はコレステロールを下げる薬を飲みます。

・副作用として筋肉痛が出たり肝臓を傷めたり、尿が赤くなつたりすることがあります。

筋肉痛や尿が赤くなることは飲み始めに多く出るので、その場合はお薬をやめて再診するようにして下さい。

・併用を注意する薬剤があります。他の薬剤を使用している場合や、新たに使用する場合は、必ず医師または薬剤師に相談して下さい。

甲状腺疾患

・甲状腺ホルモンは体の新陳代謝に関わるホルモンです。生きるためには必要ですが、多くあっても少なくとも具体が悪くなります。

・甲状腺ホルモンが過剰な状態と不足な状態があります。

・甲状腺ホルモンが過剰な状態としてバセドウ病のような病気があります。脈が速くなつたり、汗が沢山出たり、手足が震えたり、体重が減つたり、眠れなくなつたりします。

・バセドウ病の治療の薬では痒みが出たり、肝臓が傷んだり、熱が出たりする副作用が起きることがあります。副作用が起きないか確認のために最初 2 か月は 2 週間毎に来て検査を受けてもらいます。

・またバセドウ病の薬は勝手にやめるとさらにひどいことになるので、副作用が出た場合は速やかに受診するようにお願いしています。

・甲状腺ホルモンが不足した状態として橋本病（慢性甲状腺炎）という病気があります。脈が遅くなつたり、疲れやすかつたり、足がむくんだり、気持ちが沈んだりします。

・橋本病の治療の薬は甲状腺ホルモン自体をお薬にしたものです。従って、ずっと飲み続ける必要があります。お薬が切れないように注意して下さい。

・慢性甲状腺炎は経過で甲状腺が壊れてしまうので、徐々に甲状腺ホルモンを作る能力が落ちてしまいます。受診してもらった時にホルモンの値を測りながら適切な量を補充してもらうように調整します。

・併用を注意する薬剤があります。他の薬剤を使用している場合や、新たに使用する場合は、必ず医師または薬剤師に相談して下さい。

は、必ず医師または薬剤師に相談して下さい。

・その他、ご不明な点などございましたら、内科外来/糖尿病内分泌センターまでお問い合わせください。

お問い合わせ先：076-252-2101（代表）